

システムキッチンに食洗機は必要か



こんにちは、ガマです。

先日、設備（水廻り）関係の標準設定をするべく、娘と話し合いました。風呂・トイレ・洗面は娘の感性を信頼し、システムキッチンも娘の意見に従いましたが、食洗機で考えに違いが出たのです。

娘は今時のことだから必要と言います。

私は、つけるべきでないと言います。私の経験を話しました。

今の我が家のシステムキッチンは15年前にリフォームしたものです。L字型壁付タイプで2700×2700。北側にシンクを据え、その左側にトールがあり、片開きの戸を開けると食器乾燥機がシンクの方に引き出せます。

食洗機はシンクの右下、その右並びにオーブンレンジ。シンク側ではない方には、セパレートになっている食器棚と冷蔵庫。面材はすべて、その頃流行の木目調で、ワークトップは人造大理石。これぞシステムキッチン。

食堂が明るくなり、清潔で文化的。奥さんの料理もいっそうおいしく感じたものです。それが、5年目に食洗機がこわれ、7年目にオーブンレンジ、10年目には冷蔵庫、メーカーに話をしても型式が古いから、交換する部品がないとか、今は販売していないとか、いい訳がましい返事ばかり。

ああ、日本のシステムキッチンはシステムではないのだとその時、理解しましたね。システムキッチン発祥地ヨーロッパでは、システムキッチンのシステムとは、どのメーカーの物でも組み込める、あるいは選べる為のものなのです。

例えば、日本で言いかえるなら、ワークトップはTOTOがいい、シンクはINAX、オーブンレンジはナショナルで食洗機は三菱、棚や扉はヤマハを使う、それが出来るシステムだということですね。

ところが日本では、他のメーカーと交換することが出来ないどころか、同じメーカーのものでも古くなると生産しないから直しもできないのです。全くのセクト主義、立割行政みたいなものですね。その悲しい現実が我が家の冷蔵庫。システムキッチンの冷蔵庫がこわれ、取り出した空洞に小さな冷蔵庫が祠の中のご本尊の様に鎮座まします。



だから、日本のシステムキッチンでは余分の物をつけない方が言いというのが、私の主張。ワークトップに継ぎ目がないですから、ゴキブリのはい出る隙間がないことで良しとしなければ…ね。

我が家のペット

クーの裏技



「クッキー」と下の娘が名付けた雑種のトラ猫を飼っています。

10年前に、中庄から二日市へ抜ける峠道で拾ってきました。オスでしたが去勢を施し、その為なのか、ふっくらと肥え、それなりに威厳のある物腰のニューハーフに育ちました。立ち居振る舞は、ど

ことなく横綱の白鵬をほうふつとさせてくれます。

どこをネグラにしているのか、勝手気儘に生活しており、腹をすかせるとどこからともなくあらわれて、8字型に円をえがきながら足に体をこすりつけて、餌を催促します。夕食が魚か鶏肉だと必ずテーブルの私の足元に座り込み、手を伸ばして、膝に爪をたてて「少しおくれ」とばかりに低音で「ニャー」と命令してきます。身をほぐして鼻先にもって行ってやると、しっかりと匂いをかぎ、口にくわえますが味が気に入らないとポイと床に放り捨てて、出窓のカウンターに飛び上がり、引き違い窓を開けて外へ出てゆきます。

以前、休日に遅い朝食を食べながら新聞を読んでいますと「クー」が横を通過して出窓のカウンターにかけ上がっていたことがありました。その後「ニャア・ニャア」と背後で鳴き続けます。「何だ？」とふり返ると引き違い窓に片手をそえて、引っぱっているのですが、鍵がかかっている開けられないらしいのです。「ちょっと待てよ」といいながら鍵をといてやると、すつと窓を頭分引き開け、顔を出して外をさぐっています。

私は再び新聞に目をやり、しばらくして、窓の方に目を移しました。当然、「クー」はいません。いやそればかりではありません。引いて開けたはずの窓がしっかりと閉められているではありませんか。

その時、私の頭の中で、窓を引いて開け、出た後でしっかり窓を閉める「クー」の姿がありありと再現されたのです。

これはナベ猫どころではありません。たぶん「動物奇想天外」にも出演できるでしょう。

私はあわてて「クー」を見つけに庭に出ました。そこでは、奥さんが洗濯物を干してい

ました。

「おいクー見たか」

「見たよ」

「どこへ行った」

「物置の方」

「はよ見つけんといかん」

「どうして」

「クーな、窓を開けて、それから閉めよるんよ」

「はあ！？」

「窓から出たら、窓閉めよるの」

「窓閉めたんは、ワ・タ・シ！」

読後雑感

「月と日本建築 桂離宮から月を観る」

宮元 健次・著 光文社新書



子どもの頃から月を眺めるのが好きでした。最近は特に、満月に願いごとをすると叶うという話を真に受け、一生懸命お願いしています。11月は13日が満月だったので、「展示場がにぎやかで楽しくなる(断定すると良いらしいです)」とお願いしました。14日(金)。平日にもかかわらず、朝から夕方まで途切れることなく、人が来られ、笑いが絶えませんでした。まるで業者の人たちの喫茶店。

気持ちはちょっと複雑でしたが、業者の方が1日に集中するのも珍しいことでした。12月も13日が満月です。またお願いしようと思っています。

さて、そんなときに父の本棚から見つけたのが本書。平安時代の日本人の月への思い、執着ぶりには、驚くべきものがありました。

月見台はもちろん、建物は、月をより観やすくするため床高にし、軒の出は短く。特に「月の出」は重要視され、一瞬でも早く月の姿をとらえ、何物にも遮られないように工夫されたといえます。春・夏・秋・冬、四季の月を楽しむためにそれぞれ建物を建て、季節に合った木や花を植え。建物自体の方角も、当時の月の出の方位と一致。月に合わせて建てられていた可能性が高いことが分かっています。

そもそも桂離宮の建てられた「桂」は「古くから観月の名所として知られてきた」場所。月のきれいに見える土地に、月をよりよく楽しむための建物を建てる。建物だけではなく「月見橋」や「浮月の手水鉢」、水面にうつった月を楽しむための池や舟など、考えられる限りの方法で月を愛で、その情景や気持ちを歌にしていたのですね。コンビニエンスストアや外灯で夜も明るい今とは違い、暗い夜空が月をよりきれいに光らせていたに違いありません。

展示場のように父まかせではなく、私がいつか自分の家を設計し建てる時は、月を美しく眺められる部屋、というものを造りたいですね。贅沢だなあとします。

千の夢話

冬を迎える展示場

こんにちは。冬生まれなのに、冬に弱い中井 千尋です。寒くなりましたね～。ここ数日は風が強く、ひどいときには看板が用水に落っこちちゃいました。みなさんも、吹き飛ばされないように気をつけてください。オープンの際にいただいた植物も、冬を越すため納戸へお引越しです。(写真)

冬眠したい私ですが、冬眠する家も、寒かったら何にもなりません。昔、夏も冬もとっても涼しい家に住んでいたことがあります。古い木造住宅です。冬は、家に帰ってご飯を食べて、お風呂に入ったらすぐ寝ていました。寒いから。暖房器具が壊れているなら修理に出し、壁に穴が空いているなら塞ぎ、元気に冬を乗り越えましょう。

展示場も今年初めての冬を迎えます。夏はエアコンを除湿にしているだけでも涼しく、過ごしやすかったのが、冬も楽しみです。お天気の良い日は、今のところ太陽の光だけでも夕方まで暖かいです。

また、12月には一度、展示場のお風呂に入ってみようと考えています。そして、「お風呂の中で風邪をひきそうだ(祖父母評)」という20年以上前のお風呂(実家)と比べてみるつもりです。またご報告しますね。



ブログ「親子で起業 奮戦記 ～帰りたくなる家造りを～」 <http://yu-rinhome.seesaa.net/>
(ユーリンホームで検索してみてください)